IS[インフィニット・ストラトス] 空舞う比翼

Ｇｒａｎｉ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ［インフィニット・ストラトス］　空舞う比翼

【Ｎコード】
Ｎ７７１２Ｓ

【作者名】
Ｇｒａｎｉ

【あらすじ】
女性にしか使えないパワードスーツ『ＩＳ』
しかし、その概念はただ一人の例外である男性、織斑一夏がＩＳを起動させたことにより根本から覆されてしまう。
それから数ヶ月後、一人の男性がＩＳを起動させたことが再び世界を震撼させた。

その男の名前は、藤宮準一。

この物語はそんな男、藤宮準一を主人公とした物語である。

前置き

第１章から第１０章までは主人公である準一がＩＳを起動させ、自分との葛藤を乗り越えてＩＳ学園に入るまでの数日間を書かせていただきました。
１０章まではバトル要素も余りなく、地味な文面が続くだけなのでそういうのが苦手だという方は１１章からお読み下さい。（１１章の前書きにこれまでのあらすじは簡単にですが書かせて頂きますので、１０章までを読んでない方が１１章から読み始めても問題無いようにしてあります）

では、始めます

第1章　プロローグ（前書き）

初投稿です。基本的に原作の流れは無視してオリジナルストーリーでいきます。

文脈的に間違いなとがあるかも知れませんが、よろしければ見つけられた方はご報告して頂けたら幸いです。

では、始めます。

第1章　プロローグ

「……どうしてこうなった」

どこかの会議室だろうか、椅子に腰掛けている一人の少年「藤宮準一」がそう呟いた。誰かに向けて言ったわけではなく、ただの独り言である。

「どうかされましたか、藤宮さん？」

そんなただの独り言であるにも関わらず、長机を挟んで準一の真正面に座る女性はいちいち言葉を返す。

「いえ、べつに……」

「そうですか。
では、本題ですがこちらの書類にサインを頂けないでしょうか？」

女性はそう言うと椅子に置いていたビジネスバッグから一枚の書類を取り出し、それを準一の目の前に置いた。

「こちらの書類にサインして頂ければ、貴方はＩＳ学園の生徒となります」

女性はそう言うとうっすらと微笑んだ。その笑みにきな臭さを感じながらも準一は書類に目を通す。

「……」

書類には様々な重要なことが書かれていた。なんせ入学に関わる重要な書類だ。しかし、その中身は一つとして準一の頭には入らなかった。
何故なら、準一は書類より別のことを優先して頭の中で考えていたからだ。
それは、何故自分がこんな状況下にいるのかであった。

「……どうしてこうなった」

準一は今度は目の前の女性に聞こえないように小さくそう呟き、そして今日起こった、正確には準一が起こした出来事について思い返していた。

第2章　謎の郵便物

事の発端は昨日。ゴールデンウィーク中で学校が休みの為、高校一年である準一は昼間から家でごろごろしていた。
すると、家の外から男性の声が聞こえた。

「宅配便でーす。藤宮準一様はいらっしゃいますか？」

「……」

せっかくの休日を謳歌していた（といってもごろごろしていただけだが）準一にとってこれほど迷惑なものは無かった。準一がいる2階の自室から玄関まで向かうのが面倒だったのだ。
しかし、今家の中には準一しかいない。家族は準一を留守番させて皆朝から出掛けている。

「……何の用ですか？」

仕方なく玄関に下りてドアを開けると、そこにはやけにニコニコした宅配便の男性の姿があった。

「藤宮準一様にお届けものです！」

宅配便の男性はそう言って一枚の封筒を取り出した。宛名は確かに藤宮準一様となっていた。

「どうも……」

藤宮はそれを受け取ると宅配便員に一礼してそのまま家に引っ込ん

だ。

「差出人が書いてない……一体何なんだこれ」

藤宮は部屋に戻ると早速封筒を確認した。しかし、どこを探しても差出人が書かれていない。だが宛名は自分宛てになっていた。光に透かしてみると中に紙が入っているのが分かった。どんな色をしているかはわからなかったが、文字が書かれていた。。

「……とりあえず、開けてみるか」

封筒をびりびりに破って中身を取り出す。出てきたのは、二枚のチケットだった。

「なんだこれ……？」

そのチケットには、『ＩＳ展示会　特別招待券』と書かれていた。ＩＳ展示会とは、現在東京で行われている世界中のＩＳが展示され、ＩＳの操縦体験（女性限定だが）、ＩＳの試合などが行われる、恐らく今１番話題沸騰中のイベントである。
それゆえ、チケットの入手はかなり困難で、オークションでもかなり高値で取引されているような品である。
そんなチケットが何故か自分の元に届いたのだ。

「……もしかして妹のか？」

藤宮の頭に現在中三の妹である由紀の姿が思い浮かんだ。大のＩＳ好きで、余りに好きすぎて来年はＩＳ学園に絶対入学すると言って猛勉強している由紀なら、このチケットについても納得がいく。

「とりあえず、後で見せてみるか」

そう言うと、準一はチケットを机に置いて昼寝を始めた。

第3章　夢（at the polar region）

海上――何処の海かは分からない。氷山が見える辺り、北極海か南極海のような気がする。

『ここは……何処だ……？』

目を開けると、何故か準一はある氷塊上に立っていた。そこには見渡す限りの海が広がっていた。一面に氷山の白と海面の青が広がる、そんな静寂な世界。

ドゴォォォン

突然、静寂を破るかのように大きな爆音が聞こえてきた。白と青の世界に爆煙の灰色が混じっていく。

『な、何が起こっている……？』

爆音のした方を見る準一。そこには、灰色をした2対の細い砲台が海上から顔を覗かせていた。銃口からは灰色をした煙が立ち込めていた。

と、その砲台目掛けて黒い何かが突っ込んでいった。

『あれは……ＩＳ？』

準一が見た黒い何か。目を凝らして見るとそれはＩＳに酷似していた。

そのＩＳらしきものは何も無いところから黒い剣を作り出すと、海

上の砲台目掛けて切り掛かった。

ガキィン、と鋭い金属音が海上に響き渡る。だが、砲台には傷一つ付いていなかった。
黒いＩＳが振り下ろした剣は、海上から伸びた腕によって遮られていたからだ。どうやら黒いＩＳの相手もＩＳのようだ。

「ちっ……」

突如準一の脳内に誰かの舌打ちが聞こえた。低く、そして何か怨みが篭められているような男性の声をしている。どうやら黒いＩＳのパイロットのようだ。
その黒いＩＳは態勢を立て直す為に上空に飛翔した。

「やれやれ……そうかっかしないでよ。
たかが２人仲間をやられただけだろ？」

再び準一の脳内に声が響く。今度は女性の声だった。先程の男性の声とは違い静かな声をしているが、どこか人を馬鹿にしたような口調だった。
恐らく、先程黒いＩＳが攻撃を仕掛けた相手本人だと思われる。

「うるせぇ！！
てめぇの中の仲間の価値観なんて聞いてねぇんだよ！！
俺にとっちゃあいつらは大切なんだ！！」

激昂した男性は声を荒げてそう叫ぶと、再び攻撃を仕掛けた。翼を折り畳み空気抵抗を少なくし、落下速度を速めて相手に向かっていく。

「やれやれ、全く理解出来ないね。
いいよ、その考えを訂正してあげる」

対する女性は相変わらず静かにそう答える。準一が海上を見ると、今まで砲台と腕しか見せていなかったＩＳが全身の姿をさらけ出していた。
背中に装着された２対の砲台、黒いＩＳの攻撃を防いだ強力の腕、そして背中から生えた２対の翼。姿を表した灰色のＩＳには見た感じ強そうなそれらの装備が備わっていた。

「はぁぁぁぁぁ！！」

気合いの篭った掛け声と共に上空から灰色のＩＳ目掛けて急降下する黒いＩＳ。灰色のＩＳまで後１００メートルという所に達した時、黒いＩＳは腕を灰色のＩＳ目掛けて突き出した。その拳からは黒い粒子状の何かが漏れていた。

「これでも喰らぇぇぇ！！」

腕を突き出してから僅か１秒。黒いＩＳの拳が灰色のＩＳに直撃した途端、そこを中心として大爆発が起こった。

『うわっ……』

思わず屈み込む準一。爆発の余波と大きな爆発音が準一を襲う。準一の体は爆風により１メートル程後ろに押し倒されてしまった。

『痛てて……』

氷床に勢いよく腰をぶつけた準一はそこを摩りながらゆっくりと立

ち上がる。準一が辺りを見渡すと、最初に見た穏やかな景色は何一つとしてなくなっていた。
先程までは波一つ無く穏やかだった海は、今は白波が荒れ狂っていた。海を漂っていた氷山の殆どが砕け、かけらが海に浮かんでいた。
空気も淀み、あちらこちらに黒煙が漂っていた。
そして、そんな黒煙の中に黒いＩＳが浮いているのが見えた。

その瞬間、ふと黒いＩＳが顔を横に向けた。自然と準一とパイロットの目が合ってしまう。

『……』

準一は知ってしまった。あの黒いＩＳのパイロットが誰なのか、あの低く怨みの篭った声をしていたパイロットが誰なのかを。
それは……準一がよく知る人物だった。

第４章　兄妹

「ただいま～！」

由美の帰宅を知らせる声が聞こえ、準一は目を覚ました。目を開けると、そこは見慣れた自分の部屋だった。

「夢……か」

先程まで自分が体験していた出来事を思い返す。夢だと言ったものの、それは夢にしてはリアルすぎた。未だにあの光景がはっきりと頭に浮かぶ。爆発音も、爆煙の匂いも、そして、あのパイロットの顔も。

「あのＩＳのパイロットの顔、あれは間違いなく……」

そこまで言って、準一は考えるのを止めた。これ以上考えても結論は出そうにもなかったからだ。

と、不意に準一はチケットの事を思い出した。

「夢のことより、今は妹に色々聞く方が重要だな」

準一は呟くとチケットを持ってリビングに下りていった。リビングには制服姿の妹がソファーに横たわり雑誌を読んでいた。

「おい、制服にシワが付くぞ」

「うっさい」

女なんだから少しは体裁を気にしろよと思いながら、準一はソファー横のテーブルにチケットを置き、

「なぁ、これお前のか？」

そう尋ねた。由紀はチケットに目を向けると、目を真ん丸にしてチケットを凝視し、そして手を震わせながらチケットを手にとった。

「お兄ちゃん、こ……これって……」

わなわなと手を震わせて準一の方を見る由紀。準一がＩＳ展示会のチケットだと告げると、

「……」

突然由紀はソファーに突っ伏せた。あまりに興奮して感極まり気絶したのだろう、しかしそれでもチケットをぐっとにぎりしめていた。

「おい、起きろ」

そう言って由紀の頭を何発も叩く準一。疑問はまだ残っているのに勝手に気絶されては話が進まない。

「あれ……私……」

「ようやく目覚ましたか。何発叩いても起きないから死んだのかと思ったぜ。

そんで、これはお前のか？」

目を覚ましてばかりの由紀にいきなり質問を投げかける準一。由紀

は嫌そうな顔をしながら、

「う～ん……確かに私はこのチケットが喉から手が出るくらい欲しかったけど、チケットの予約取れなかったんだよね。多分お兄ちゃんの物だよ、それ」

チケットを見ながら恨めしげに由紀はそう言った。それを聞いて準一はより悩むことになった。

「お前のじゃないのかよ……じゃあなんで俺宛てにこんなんが送られてくるんだ？」

「そんなのどうでもいいじゃん。普通にそのチケット使っちゃえば？つかそんなラッキーアイテムを手にして使わない馬鹿はいないよ。あ～あ、私宛てに届いてたなら絶対使ったのに……」

ぶつぶつとそう呟き、由紀は再び雑誌に目を通し始めた。謎は少しも溶けなかった。

第5章　ＩＳ展示会

数日後、準一はＩＳ展示会場に来ていた。
結局あれから何回もチケットについて考えたが、納得がいく考えには至らなかった。
だから結論として、「なぜかわからないがチケットを知らない誰かから頂いた。残しておくのは勿体ないので使うことにする」という結論を無理矢理導いた。

「うわ～、すごーい！」

そんな準一の隣ではテンションＭＡＸで騒いでいる由紀の姿があった。二枚あるチケットの内、自分用に一枚使うとすると一枚余ってしまう。あげる当てもなく、しかしこのまま捨てるのは勿体ない。というわけで、少しだが協力してくれた由紀にあげることにしたのだ。

「うわ～、１／１白式だ！
カッコイイ！」

展示会入口に飾られている白式の模型を見てはしゃぎまくる由紀。恥ずかしいからやめろと注意しようとした準一だったが、その時後ろから声をかけられた。

「準一様、お渡しするのをわすれていました」

声をかけてきたのは準一達が入場した際に対応してくれた女性職員だった。職員は準一に近付くと入場券とはまた違ったチケットを渡した。

「本日１１時より第三会場にて行われるＩＳ体験の入場券です」

「え、これって……」

チケットを受け取り準一はうろたえた。何故ならそのチケット、ＩＳ体験のチケットは当日券しか配布されず、しかもこのＩＳ展示会の最大イベントであるため爆発的人気があり、手に入れるには朝一で会場入りし急いで配布場所に向かい、そして熾烈な争奪戦を制さねばならないくらいに貴重なチケットなのだ。
更にチケットをよく見ると座席は最前列中央、つまりイベントを観覧するのに一番のポジションであった。

「なんでこんなものを俺達に……」

「私達にもわかりません。ですが藤宮様がいらっしゃったらお渡しするようにと言われてまして……」

職員はそう言うとチケット売り場の方へと戻っていった。そして入れ違いに由紀が準一の元に戻ってきた。手にはカメラが握られている。恐らくそのカメラで白式を何十枚も録ったのであろう。

「いや～、楽しいね～！！」

満面の笑みでそう言う由紀だったが、準一の手に握られたチケットを見た途端にその笑顔は消え、代わりに驚きの色が見えた。

「お兄ちゃん……それって……」

「あぁ、ＩＳ体験のチケットぉぉぉう！！」

準一が全てを言い切る前に由紀の突進にも似た抱擁が準一を襲った。

「お兄ちゃん大好き！！
もう、そんなの隠してたなんて！！」

「いや、隠してた訳じゃ……って苦しい苦しい！！早く放れろ……！」

由紀の腕はガッチリと準一の首をホールドしていた。うまく息が出来ない苦しみから解放されたくて体に纏わり付く由紀を力付くで放そうとする準一だが、準一より由紀の力が強すぎる為か放すことは出来なかった。

「くそ……早く放れないとチケット渡さないぞ……」

準一が息も絶え絶えにそう呟くと、ようやく由紀は準一の体から離れた。

「げほっ、げほっ……相変わらずの馬鹿力だな……」

「ゴメンゴメン、余りに興奮しちゃってさ……」

「ったく、はいチケット」

息を整えながら準一は由紀にチケットを渡した。チケットを受け取り満面の笑みを浮かべた由紀だったが、突然その表情が固まった。

「お兄ちゃん、開演時刻１１って書いてあるけど……」

「おう、１１時からみたいだな」

「みたいだな、じゃないよ！！
今の時刻確認しなよ！」

由紀はそう言うと準一に自分の時計を見せてきた。時計の針は丁度１１時を示していた。

「げっ、もう始まってるじゃねぇか！！」

「何で時間確認してないのよ！！
早く行こう」

慌ててあたふたしている準一の手を握ると、由紀は会場に猛ダッシュで向かっていった。

第6章　イレギュラーな出来事

「ふぅ、何とか間に合ったね……」

「助かったな」

「助かったな、じゃないよ。
本来なら間に合ってなかったんだよ！？」

開場時刻から数分遅れで会場に着いた二人だが、設備などの問題が発生した為に開場時刻自体が少し遅れていた。その為二人はなんとか開始前に会場入りを果たすことが出来た。

「けど、チケットのことといい、ほんと私達って運いいよね」

「正確には俺の運がいいんだろうけどな」

そんな他愛もない会話を繰り返していると、開場を知らせるブザーが会場に鳴り響いた。

ビュゥゥゥン！！

ブザーが鳴ると同時に、二人の頭上を何体ものＩＳが音を発てて飛び去っていった。赤、青、黄、様々な色をしたＩＳは複雑な動きで観客を魅力すると、そのまま半開きになった屋根を抜けて外へと飛んで行った。

「うわ……」

「すご～い」

観客席の至るところから感嘆の声があがった。

「皆さん、ようこそいらっしゃいました！！」

と、壇上から女性の声が聞こえてきた。ＩＳに見取れて上空を見上げていた頭をその方向へ向けると、展開されたＩＳに乗った女性がマイクを握って立っていた。どうやらこの女性が司会を務めるらしい。

「先程のパフォーマンスはいかがだったでしょうか？
彼女らは今年のモント・グロッソ杯にて……」

女性司会者は先程のパフォーマンスについての解説を始めた。観客の殆どは食い入るようにその解説を聞いていたが、準一の耳にはその話は一切伝わってこなかった。その時、準一の頭は先程のＩＳのことで埋め尽くされていたからだ。

『すげぇ……俺と同じ人間なのにあんな動きが出来るのか……』

その時、準一は自分が男であることをほんの少しだが残念に思った。もし自分が女でしかもＩＳを動かす才能があったなら、あんなことが出来たのだろうか……。

「お兄ちゃん、起きてる？」

由紀の言葉が準一の思考を遮った。ふと我に帰る準一。馬鹿な妄想

をしていたなと少し恥ずかしさを覚え、壇上を見ると司会者の姿が無かった。

「あれ、もう体験会は終わったのか？」

「体験会は今からだよ。
司会者は舞台裏に体験用のＩＳを取りに行ってる……てか寝てたんだ」

せっかくいい話だったのにと呆れた顔をしてそう呟く由紀。すると司会者が再び舞台に戻ってきた。先程まで司会者を包み込んでいたＩＳだが、今は待機状態であるブレスレットになって司会者の手に握られていた。

「では、これより皆様にはＩＳを体験して頂こうと思いますが……」

女性司会者はそう言うとちらりと準一の方を見た。そして、

「その前にＩＳ最大の謎、『ＩＳは女性にしか動かせない』というのが本当なのか実験してみましょう。
最前列中央にお座りのお二方、壇上へ上がって頂けませんか？」

突然準一と由紀の二人にそう尋ねてきた。
ＩＳに乗れるということで、由紀は快くその申し出を受けたが、準一はそうではなかった。準一が壇上に上がるのは男はＩＳを動かせないという証明の為だけである。準一にメリットは無く、逆にＩＳを起動出来ないという醜態を観客に曝してしまう。

「俺は遠慮しま……」

だから申し出を断ろうとした準一だったが、ふと観客席を見ると皆が準一の方を見ていた。皆準一が壇上に上がることを期待しているらしい。

「……いきます」

準一にはこの空気の中辞退するなんてことを言う勇気は無かった。観客の期待を裏切らない為に準一が壇上に上がると、会場からは盛大な拍手があがった。

「よく来てくれました」

司会者はそんな準一に笑顔を向けてそう言った。観客から見ればその笑顔は壇上に上がってくれた準一に対する感謝の気持ちの表れだと捉えただろう。しかし、準一には何故かその笑顔の裏に何か意図が隠されているように見えた。

「さぁ、準一君。ＩＳを装着して頂けますか？」

司会者はそう言って待機状態のＩＳを準一に渡した。ブレスレット状のＩＳを腕に嵌めると、急に準一の頭に女性の声が過ぎった。

「藤宮準一……私が……」

「つぅぅ……」

謎の声が頭に響くたび、準一を頭痛が襲った。思わず気を失ってしまうかと思うくらいの痛みだった。しかもその頭痛は徐々に強くなっていった。

「待っていたよ……藤宮準一君。
さぁ、行こう」

「行こうって……何処にだよ……」

「何処って……それはね……」

そして、その言葉を最後に準一の意識は完全に途絶えた。

第7章　夢（at a secret base）

目を覚ますと、準一は何故か床に横たわっていた。先程まで壇上に立っていたはずだが、今は顔と床が接している。

「あれ、なんで俺こんな場所に……」

ゆっくりと立ち上がって辺りを見渡す。何も無い殺風景な工場の中、しかし何故か準一にはそれが懐かしく思えた。

「この場所……昔どこかで……」

自分の記憶を辿りなんとか思い出そうとするが、どうしてか思い出せない。ここに来たことがあることは確かだ、しかしいつ、何の為に、そしてここで何をしていたのか思い出せなかった。

と、そんな準一の目が工場の奥で誰かこちらに向かって歩いてくるのを捉えた。

「誰だ……？」

目を懲らしてその顔を確認しようとする。工場の中は薄暗く、顔を確かめることは叶わなかったが、うっすらと見える体つきからして女性であることは分かった。

「藤宮準一君、久しぶりだね」

不意に自分の名前を呼ばれ、準一は少し動揺した。準一を呼ぶ声は透き通るような、準一の心に直接伝わるような声をしていた。

そして、準一はその声に聞き覚えがあった。が、先程同様思い出そ

うとしても何故か思い出せない。
「突然だけど今の君に再び問いたい。
翼……欲しいかい？」
再び女性は準一に語りかける。だが何を言っているのかわからない
準一はただ黙っているしかなかった。
「ふむ……あれから何年も経ったけと、まだ答は見つからないのかな」
そう言うと、女性は踵を返して再び闇の中へと消えていった。
「ちょ……待て！」
「けど、私の気のせいかな、口に出さないだけで君が翼を欲しがっているように見える。
どうかな……？」
女性の姿は見えなくなったが、暗闇の中からはまだ声は聞こえる。
「な……何を言っているのかわからない！！
どういうことなんだ！？」
「わからないのならわからないままでいいよ。
いつかきっと、答は見つかるはず……」
そして、その言葉を最後に女性の声は聞こえなくなった。一人工場に佇む準一。と、いきなり腕が光りはじめた。
準一が自分の腕を見ると、先程装着した待機状態のＩＳが光り輝い

ていた。

「なんで……ＩＳって女性にしか使えないんじゃ……」

準一が全てを言い終える前に光は準一を包み込んだ。

そして、自身を包む光の懐かしいような暖かさを肌に感じながら準一は再び意識を失った。

第8章　不完全な起動

「おい……あれ……」

観客のざわめきで準一は目を覚ました目を開けると、そこには観客の姿があった。

『また夢を見てたのか…最近疲れてるのかな、俺』

そう言って溜息一つつく準一。ふと前を見ると、目を大きく開けて驚く観客達の姿が目に飛び込んできた。

「……？」

何に驚いているのか分からないが、観客全員の視線が準一の方を向いていた。もしかして自分の後ろに何かあるのかもしれないと思い準一は振り返ったが、何もない。

「す……すごい……」

観客の一人がそう声を漏らした。それにつられて周りの観客もざわめき始めた。

誰が凄いのか、何が凄いのかさっぱり分からない準一は困ったように頭を掻いた。

コツン。

準一の頭に何か固いものが当たった。それも、今自分が掻こうとしていた所に。

「……」

嫌な予感を感じ、頭に当てた手をそのまま降ろし、そして顔の前に持って行く。

降ろした準一の手には、いつの間にか中世西欧の騎士が身につけていたような篭手の形をしたＩＳが装着されていた。

「な……なんじゃこりぁぁぁ！！」

第9章　状況確認、そしてこれからの選択

話は冒頭に戻る。
会場で見事ＩＳを部分的にだが起動させてしまった準一。勿論体験会は中断、その原因である準一は関係者に連れられて会議室まで連行、そして今に至る。

「書類、読んで頂けましたか？」

椅子に座る準一に女性が話しかける。しかし物思いに耽っていた為全く文面を読んでいなかった準一は、

「すみません、読んだのですが何を言っているのかサッパリで……」

と嘘を付きごまかした。

「そうですか……では私から簡単に説明させて頂きます」

女性は少し困ったような表情をしたが、すぐにいつもの営業スマイルに戻すと説明を始めた。

「今日、原因は未だ不明ですが貴方は男性でありながらＩＳを起動させました。かの織斑一夏様と同じように」

「はい」

「これは女性にしかＩＳを動かせないという常識を完全に覆す事態となりました。
これがどういう意味を表すか、分かりますか？」

女性の説明を聞き、ようやく準一は事の重大さに気付いた。準一はかの織斑一夏に続く史上二人目のＩＳ起動を果たした男性となったのだ。
そして、同時にそれは準一がただの一般人では無くなったことを表す。

「今後、準一様を取り巻く環境は１８０°変わります。
ＩＳを動かせるという理由で、貴方は様々な組織に狙われたりもするでしょう。ご家族に危害が加わる可能性もあります」

会議室の中はクーラーが効いているはずなのに、準一の額を一筋の汗が流れた。女性の話が準一に重くのしかかる。自分だけでなく家族にまで迷惑をかけることになってしまうのが1番心に響いた。

「そこで！」

突然女性は明るい口調で言葉を発した。まるで準一に心配する必要はないと言っているようだった。

「私は貴方にＩＳ学園への編入を推薦します。
何故なら、ＩＳ学園には特記事項第２１条というものがあり、それが貴方を救ってくれるはずだからです！」

女性はそう言うと先程準一に渡したプリントに書かれた一行を指差した。そこには、

『本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。本人の許可がない場合、それらの外的介入は”原則として”許可されないものとする』

と書かれていた。つまり、ＩＳ学園にいれば外部からの危害などは加えられないということらしい。

「あの男性初のＩＳ操縦者、織斑一夏様もその為にＩＳ学園に編入されたのだと聞いています。
どうですか、今の状況の解決策としては最高のものだと思われますが……」

「……」

それでも準一の顔にはまだ不安の色が点っていた。

「まだ何か心配事がおありですか？」

「いや、俺のことはいいんですが家族のことが気掛かりで……。
ＩＳ学園に入ってる間に家族に危害が加わらないかと思って」

「それに関してはノープロブレムです」

暗い口調で話す準一に対してまた明るい口調で女性はそう返した。

「貴方の家族、親族には護衛を２４時間、一年通して就かせます。
勿論、その経費は国が出すので心配いりません」

さらに、と女性は強調するかのように言葉を続ける。

「その護衛のレベルも相当高いです。
恐らくアメリカの大統領を護衛するシークレットサービスにも匹敵するレベルを誇るでしょう」

まるで自分の事のように誇らしげに話す女性。だが、そんな自信に満ち溢れた話し方だからだろうか準一は自分の中にあった心配事の数々が消えていくのを感じた。だが、

「けど、今の学校辞めなくちゃいけないんだよな……」

「そうですわね。
けど、貴方が学校に行き続けたら今度はその生徒に危害が及ぶ可能性があります」

残酷なことをさらっと言ってのける女性。しかし確かにそれは正論であった。準一には、ＩＳ学園に行くしか道は無かった。

「……分かりました、ＩＳ学園、行きます！」

準一は覚悟を決めると、書類にサインした。

「……」

その様子を見て、女性は口許にうっすらと怪しげな笑みを浮かべた。

第１０章　覚悟

「おめでと～！！」

準一が自宅の扉を開けると、父親の新一と由紀がクラッカーを鳴らして準一の帰宅を歓迎した。飛び出たクラッカーの紐が準一の頭を覆った。

「……は？」

全く予測していなかった出来事に思わずほうけてしまう。

「は？じゃないだろ。
何ぼうっとしとるんだ、早く家に上がれ。
お前の為に急ピッチでパーティーの用意したんだから」

「そうだよお兄ちゃん、早く食べようよ」

新一と由紀はそう言ってリビングに戻っていく。事態が飲み込めないまま準一も後に続いた。

「俺の為って……俺なにか凄いことしたっけ……」

準一がリビングに入ると、テーブルの上にはチキンや肉やら祝い事でも無い限り食卓に並ばないような食べ物ばかりが並んでいるのが見えた。
中央にはいかにも手作りと言えるケーキが置いていて、その真ん中には、

『祝・ＩＳ学園入学！』
と書かれていた。
「はぁぁぁ……」
それを見た途端、準一は力が抜けてそのまま床に倒れた。それに驚いて新一と由紀が急いで準一のそばに駆け寄った。
「準一、大丈夫か！？」
「お兄ちゃん、大丈夫？」
「大丈夫って……俺から言わせりゃあんたらの方が心配だよ」
準一が起きるのを支える二人に対して準一は呆れた声でそう言った。
何のことを言われているのかわからないと二人は顔を見合わせる。
その光景を見て準一は再び溜息をついた。
「あのなぁ……どこが祝い事なんだよ。
全然祝えねぇよ」
「何故だ？」
準一の言葉に対し新一はすぐにそう返した。
「何故って、そんなの決まってんだろ。
俺がいらんことしたせいで家族に危険が及ぶかもしれないような事態になってんだぞ！
これの何処が祝えるってんだ！」

準一は思わず声色を険しくしてそう叫ぶ。こんな危険な事態に対して祝い事をしようとする家族、そしてその危険に家族を巻き込んでしまった自分に対して準一は苛々していた。

「確かにあの女性は護衛が付くから大丈夫だと言ってたさ。
シークレットサービス並の護衛が付くって。
けど、それでも家族が命を狙われてるのに変わりはないだろ！？
それなのになんで安心しきってるんだよ、馬鹿なのか？

けどそれ以前に、なんで俺は家族を巻き込んで迷惑なこと起こしてんだよ！！
最低だよ、俺……」

自分の心にしまい込んでいたものを全て言葉にして吐き出す。後半部分は完全に自分に対する自虐になっていた。自分の情けなさを再認識した準一の目には涙が貯まり、今にも溢れ出しそうだった。

「……」

リビングが沈黙に包まれる。ケーキに刺さっている蝋燭が全て熔けてしまう、それくらい長い時間が過ぎた。

「くっ……」

と、その沈黙を破ったのは、父新一の笑い声だった。

「が～っはっは！
お前そんなこと気にしてんのか、らしくねぇな」

新一はそう言うと再び笑い出した。その光景を準一はただ黙って見ていた。
やがて、新一は一通り笑い尽くしたのかいきなり真面目な顔になった。

「俺はなぁ、命が惜しくない訳じゃねぇさ。
今はこう気丈に振る舞ってるが、正直の所ビビりまくってる。
だってそうだろ、今まさに狙われてるかもしれねぇのに何も気に留めない奴なんてそういねぇさ」

けどな、と新一は続ける。

「俺はそれ以上に、お前がＩＳを動かせるなんて特別な才能を持ってたことが嬉しいんだよ。
勉強もろくに出来ない、何の取り柄もない、唯一自慢出来るのは腕っ節の強さだけ。
そんなお前にも誇れる物があったってことが嬉しいんだ」

真面目な顔をしていた新一が口許に小さく笑みを浮かべてそう言った。
自分の命を危ぶんでいる準一の『才能』を、新一は誇れる物だと言い放った。

「お前がその才能を活かせるような環境に身を置くっていうなら、
俺の命が危ぶまれてお前がその才能を活かせるってなら、俺はいくらでも命を懸けてやる。
それが親ってもんだ」

「親父……」

あぁ、さっきこんな親父を馬鹿扱いしたのは何処の馬鹿だよ。一発殴ってやりたいぜ。

気付けば、準一は自分の顔を自分の拳でおもいっきり殴っていた。

「ぐあ……」

「馬鹿、なにやってんだよ」

呆れた顔で新一はそう言う。あぁその通りさ、俺は馬鹿だよと準一は心の中で呟いた。

「親父、サンキューな。
俺頑張るわ」

涙を拭い、顔を上げるとはっきりとした声で準一はそう言った。それを聞いて新一は歯が見えるくらいの笑みを見せ、

「おうよ、けどこの俺がお前のために命を懸けるんだ、それなりの成果は出せよ！絶対諦めんなよ！」

そう言うと笑いながらリビングからでていった。

「……」

改めてケーキに書かれた文字を見直す準一。

『祝・ＩＳ学園入学！』

先程はそれを見ても苛々しか感じなかったが、今はそうではなかっ

た。
準一の心には、先程の苛々はどこかへ消え去り、代わりにやる気が満ち溢れていた。
「あの～、完全に私のこと忘れてない？」
と、いきなり準一の後ろから声が聞こえた。慌てて準一が振り返ると、そこには明らかに不機嫌そうな顔をした由紀の姿があった。
「ゆ、由紀……いたのか……ビビらせるなよ……」
いきなり声をかけられ、まだ心臓の動悸が収まらず準一は震えた声でそう言った。
それを聞き由紀は溜息一つ付くと、
「最初からいたよ……全く。
いつの間にかお父さんと二人で話始めてさ。
私も一応命狙われるかもしれないし、無視は無いでしょ」
そう呆れた顔で言った。
「すまん……お前にも迷惑かける」
「まぁいいけど。
シークレットサービス並の護衛なら大丈夫そうだし。
それ以上にお兄ちゃんがＩＳ学園に入るってのは私には大きなメリットだしね」
由紀はそう言うと、ケーキと同じくテーブルに置いてあったＩＳの雑誌のあるページを開いて準一に見せてきた。そこには、『巻頭特

集　ＩＳ界の超新星、織斑一夏に迫る』という記事のタイトルとその織斑一夏の顔写真が写っていた。

「お兄ちゃん、ＩＳ学園に入ったらまず織斑一夏さんと友達になって！」

「なんでだよ！」

思わずそうツッコミを入れる準一。しかし、そんなツッコミをした割には準一には由紀が何を考えているのかは大体分かっていた。

「そんなの当たり前じゃない。
お兄ちゃんが一夏さんと親しくなる、そしたら休みなどを利用して一夏さんが我が家に遊びに来るかも、そしたら……」

「私と一夏さんも仲良くなり、そしていつの間にか私と一夏さんは特別な関係に〜〜……ってか？」

「違うわよ馬鹿！」

由紀に関する行き過ぎた妄想をした準一に対して由紀が蹴りを入れる。キックボクサー顔負けのハイキックは準一の頭を直撃、準一はそのまま勢いよく床に倒れた。

「おおぉぉぉ……頭がぁぁぁ……」

「まぁ確かに一夏さんはお兄ちゃんと違ってカッコイイし優しそうだし……」

「どうせ見た目だけの中身は最悪な奴だぁぁぁ頭を踏み付けるな踏

み付けるなぁぁ」

「余計な事言うな。

とりあえず、お兄ちゃんは一夏さんと仲良くなってよね、以上」

自分の言いたいことを一通り言い終え、準一への踏み付けを止めると由紀はリビングを去ろうとした。

「ま……待て！」

そんな由紀を呼び止める準一。準一には由紀に聞きたいことがあった。

「なに？」

「さっき親父が言ってた『成果を出せ』って話だけど、具体的には何すればいいと思う？

俺ＩＳの知識無いから……」

「そうね……」

準一の質問にして考えるそぶりを見せる由紀。やがて、何かを閃いたのか手を叩いた。

「そうだ、いいこと考えた！」

「何だ！？」

ＩＳに馬鹿みたいに詳しい由紀しか頼れる人がいない準一はその答に期待して顔をあげた。由紀は得意げな顔をすると、

「簡単よ、モンド・グロッソで優勝すればいいだけよ」

「馬鹿言うな、モンド・グロッソってＩＳの世界大会じゃねぇか。俺はＩＳ初心者だぞ、そこで優勝するなんて不可能に近いだろ」

「けど、目標は高めに設定しておくのが１番だよ」

そう言うと由紀はリビングを出ていった。一人リビングに残された準一は力無く床に座り込んだ。

「モンド・グロッソか……」

先程は無理だと言っていた準一だが、目指したくない訳ではない。少しでも優勝の可能性があるなら迷わず大会に出るだろう。

「けどなぁ……初心者がモンド・グロッソ制覇って……」

そう言って寝転がる準一。そんな準一の頭を新一の言葉が過ぎる。

『絶対諦めんなよ！』

「……とりあえず、やれるだけやってみるか」

仰向けに寝転がると、準一は上に向かって右手を突き出した。そして、何かを掴むかのようにその拳を強く握りしめた。

第１１章　起動（前書き）

『これまでのあらすじ』

主人公の準一はある日、差出人不明のチケットを受け取る。それは、国内最大級のイベントであるＩＳ展示会のチケットだった。
そして展示会当日、ＩＳ体験イベントにて準一は男でありながらＩＳを起動させてしまう。
それをきっかけに、準一はＩＳ学園に通うことになる――

第１１章からは準一のＩＳ学園での生活を書かせて頂きます。準一がＩＳを起動させた際に見た謎の光景と謎の女性、そして準一に纏わる謎が説き明かされていきます。

では、始めます。

第11章　起動

ＩＳ展示会での事件から数日後、準一は初めてＩＳ学園を訪れた。ＩＳをどれくらい動かせるかの確認やＩＳ適性の有無等を調査するという名目でＩＳ学園から呼び出されたからだ。

「疲れた……。
家から遠すぎるだろ」

電車とモノレールを乗り継ぐこと、計２時間半。体力には自信のある準一だったがＩＳ学園に着いた頃には疲れ果てていた。

「藤宮準一君……だね？」

ふと準一に誰かが話し掛けてきた。振り返ると一人の壮年の男性がこちらに近づいてくるのが見えた。

「はい、そうです」

「そうか。
私の名前は轡木（くつわぎ）　十蔵（じゅうぞう）、このＩＳ学園の用務員をさせてもらっているよ」

「え、はぁ……」

「さて、早速だが君を保健室まで案内させてもらうよ。検査はそこで行うからね。
さぁ、ついて来て」

轡木はそう言うとＩＳ学園の中に戻っていった。それを追い掛けるように準一もＩＳ学園の中へと入った。

「始めてＩＳを動かした時、どんな気持ちだった？」

ＩＳ学園内を歩いていると、突然轡木がそう尋ねてきた。

「どんな気持ち……よく分からないですが、なんか懐かしく優しい何かに包まれていく感じでした」

「ほう、懐かしいか……」

「はい……変ですよね、一度もＩＳなんて動かしたこと無かったのに」

「いや、男性で二人目のＩＳ起動者として大変貴重な意見を聞かせてもらったよ」

「はぁ……」

二人の間に沈黙が流れる。準一は急いで何か別の話題を考えようとしたが、思いつかなかった。

「あ、轡木さん、おはようございます」

「おはよう」

二人が廊下を渡っていると、すれ違い様に三人の女子が轡木には挨拶を、準一には軽い会釈をしてきた。

「轡木さんの後ろにいた子って、もしかしてこの前ＩＳを起動させた……」

「噂の男の子？あの織斑君の再来っていわれてる……」

「また織斑君は死んでないから……けどちょっと格好よかったよね」

準一の後ろで先程の三人組がキャーキャー言いながら話をしている。自分の容姿を褒められたことは余り無かった為、準一は少し気恥ずかしくなった。

「さて、着いたよ」

廊下をしばらく歩くと、保健室に着いた。扉からは微かにだがアルコールやら薬品の匂いがする。

「轡木さん、おはようございます」

と、廊下の奥から白衣の女性が歩いてきた。どうやら保健室の先生みたいだが、その声に、準一は聞き覚えがあった。

「あ、貴女はＩＳ展示会にいらっしゃった……」

「ふふ、久しぶりね、藤宮準一君」

その女性は、ＩＳを起動させてしまった準一にＩＳ学園への編入を奨めてきた女性だった。準一はてっきりＩＳ展示会の関係者かと思っていたのだが、本当はＩＳ学園の専属医師のようだ。

「改めて宜しくね、準一君。
私はこの学園で保健室の先生を勤めている田所　優香よ」

「よ、宜しくお願いします……」

準一がそう言うと優香は保健室の扉を開けた。先程まで微かにしかしなかった薬品の匂いが一気に準一の鼻腔を刺激する。

「じゃあ轡木さん、この子を預かりますね？」

「ふむ、宜しく頼むよ。
では準一君、また会おう」

轡木はそう言うと廊下を歩いていった。それを見届け、準一と優香は保健室へと入っていった。

「あの、轡木さんて何者なんですか？
ただの用務員って感じじゃないんですが……」

検査に使うのか、薬品を取り出し準備をしている優香に準一がそう尋ねた。ただの用務員がＩＳ学園内部を案内してくれたことに少し違和感を覚えていたのだ。

「あぁ、轡木さんはただの用務員じゃないわよ。
あの人はこの学園のトップだから」

「えぇ、つまり轡木さんは学園長！？
いや、でも確か学園長は女性だったような……」

「そうよ。
けど経営とかは殆ど轡木さんが仕切ってるのよ」
「へぇ～、だからあんなに慕われてたのか」
「それは多分轡木さんの人柄によるものだと思うけど……さて、身体検査始めるわ。椅子に腰掛けてちょうだい」

「はい、終わりよ。お疲れ様」
診察を終えた準一にそう優香が声をかける。ＩＳ学園に来るだけで体力を殆ど使い果たしていた上、審査やらで血を抜かれた準一はかなり疲れ果てていた。
「ようやく終わった……これで帰れる……」
「あら、忘れてない？
まだ重要なイベントが残ってるわよ」
「？」
優香の言葉を聞き、自分の記憶を掘り返す準一。そしてそのイベントが何なのかを思い出した。
「あ……ＩＳの起動確認？」
「ピンポーン！」
優香がそう言うと同時に準一は膝から崩れ落ちた。今すぐ家に帰っ

て休みたいくらいなのに、今からＩＳの操縦という結構体力を使うことをやらなければならないと思うと気が遠くなった。
「まぁ、頑張ってきなさい」
そう言って保健室のドアを開ける優香。すると、ドアの前に二人の女性が立っていた。
黒いスーツを身に纏った織斑千冬と黄色いワンピースを着た山田真耶だった。
「あら、織斑先生に山田先生。
どうぞお入り下さい」
そう言われて織斑先生と山田先生は保健室に入ってきた。突然登場した二人の女性に準一は戸惑いを覚える準一。
と、先に口を開いたのは千冬だった。
「そう警戒するな、私はお前がこれから所属することになるクラスの担任の織斑千冬だ。
そしてこっちが、」
「副担任の山田真耶です。
ＩＳの動作確認の為の試合の相手をさせてもらいますね」
「……よ、宜しくお願いします」
おっとりとした様子をして話す山田先生を見ながら、準一はこの人になら勝てるかもと思っていた。もし仮に相手が織斑先生だったなら、勝機は万に一つもないだろう。
「じゃあ山田先生、後は宜しく頼む。

私はモニター室で君達の試合を見ているよ」
そう言うと織斑先生は保健室から出ていった。
「じゃあ私達もアリーナへ行きましょうか」
そう言って山田先生と準一も保健室を後にし、試合会場であるアリーナに向かった。

アリーナ――
ＩＳを身に纏った準一と山田先生が対峙している。
「い、いきますよ……」
山田先生の一言で試合は始まった。開始早々山田先生のＩＳ『ラファール・リヴァイヴ』の精密な射撃が準一を襲った。
「ちょ、いきなりですか！」
それをかろうじて避ける準一。ちなみに準一が乗っているＩＳは『打鉄』、練習用として多く使われているＩＳだ。
「おりゃああ！」
摩耶の射撃をかい潜り懐に潜り込む準一。そして剣を装備して攻撃を仕掛けた。しかし、

「ハッ！！」

至近距離からの攻撃だったにも関わらず、準一の攻撃は易々と避けられてしまった。
それどころか、逆に摩耶に射撃攻撃を喰らってしまった。

「ちっ……なんで当たんねぇんだよ！」

態勢を持ち直した準一は摩耶から逃げるように空に飛んだ。だが、それを摩耶が許す訳が無く、摩耶も準一を追い掛けて空へ飛んだ。

「動きはいいですよ、準一君。
けど避けてばかりじゃ試合になりませんよ」

「避けるのに必死で攻撃するヒマなんてありませんよ！」

攻撃を避けてもまた次の攻撃が来る。攻撃に転じても隙が無い摩耶には攻撃が当たらない。準一にはとりあえず攻撃を避けるために逃げつづけるしか無かった。
たが、少しずつ、徐々に準一は追い詰められていった。

「……」

ちらりとエネルギー残量を見る準一。残されたエネルギーは殆ど無かった。

「もうそろそろ限界じゃないですか？
このままだと私に一撃も当てないで終わっちゃいますよ？」

「くっ……」

摩耶の言葉が準一の中で悔しさを込み上げさせる。攻撃も当たらず、逃げることしか出来ず、しかも負けてしまう。
しかもその相手は女で、かつ自分が弱いと思っていた相手だ。男としてこれほど情けないことは無い。

『畜生……勝てなくてもいい。
一発だけでも攻撃を入れてやる』

跳びながらそのチャンスを待つ準一。そして、そのチャンスは直ぐに現れた。
先程まで自分を狙っていた銃弾の嵐が突如止んだ。あまりに銃弾を連射したため、摩耶の銃が弾詰まりを起こしたのだ。

「今だ！」

そして、その瞬間準一はブースターを全機停止させて急ブレーキをかけた。更に足を前に出し、足に装着されたブースターを逆噴射させた。
後ろ向きの推進力を得た準一のＩＳ『打鉄』はそのまま後ろ向きに跳ぶと、摩耶の頭上を飛び越えてバックを捕った。

「なっ！？」

「遅い！！」

後ろを振り向き銃を構えようとする摩耶。だが、そうする前に準一の刀による一撃が無防備の摩耶を襲った。

「きゃあ！」

不意の一撃を喰らい摩耶は地上に落ちていった。その様子を見ていた準一は、

「……やった、一撃入れてやった……」

そう歓喜に震えていた。

「ほう、空中で自分の進む向きを変え、更に相手のバックをとるか。初心者にしては高度なテクニックを使うな」

モニターに映し出されたアリーナでの戦闘を見ながら千冬はそう言って口許に小さく笑みを浮かべた。

「織斑先生」

と、そんな千冬に誰かが後ろから声を掛けた。笑みを浮かべていた顔を急いで引き締める千冬。そしてその声がした方を振り返ると、そこには今年からＩＳ学園に勤めることになった桐原　沙織が立っていた。

「どうしたんだ、桐原先生」

「織斑先生にお渡ししたいものがありまして……」

沙織はそう言うと何やら高級そうな宝石箱を取り出して千冬に見せ

た。

「こちらです」

「ふん、私はそういったのには全く興味がないのだがな。
して、中身は何だ？」

「ＩＳです」

「ふむ、ＩＳか……ＩＳだと！？」

予想外の中身の詳細に千冬は思わず大声を出してしまった。そんな千冬にあくまで冷静な沙織は話を続ける。

「はい、ＩＳです。
それも今日入学してきた編入生、藤宮準一の専用機体です」

「……専用機だと！？
ありえん、何故数日前まで何もＩＳと関連の無かった人間に編入早々専用機が与えられるんだ。
大体、専用機自体そんな早く用意できる訳が無い！」

「……私にもその理由はわかりかねます。
ただ、考えられるとしたら藤宮準一が男でありながらＩＳを動かせるからでは……？」

「それは私も思った。
だが、専用機というのはその操縦者の為だけに作られたＩＳだ。
量産ＩＳならわかるが、専用機をこんな短期間で作り上げるなんて出来る訳が……」

千冬はそこまで言って、そんな常識はずれのことが出来る唯一の人間が存在することを思い出した。

「束か……」

その人物、篠目束の名前を呟くと千冬の口から溜め息が一つ出た。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だ……しかし、またあいつが絡んでいるのか。一体何がしたいんだ……」

「意図がわかりかねますね……それと、どうしますかこれ？」

沙織はそう言って箱、もとい準一の専用ＩＳを千冬に見せた。

「どうするも何も……渡すしか無いだろ……」

もし渡さなかったら束が何と言うか……間違い無く面倒臭いことになると千冬は思った。

「桐原先生、それは私から藤宮に渡しておく」

「わかりました。
では私は用事があるのでこれにて失礼します」

千冬にＩＳを渡すと、沙織はそのまま部屋から出ていった。

「……」

沙織が出ていった後、千冬は椅子に座り込んだ。モニターを見ると地面に倒れた準一の姿とその側に立つ摩耶の姿があった。

「攻撃を当てることが出来たからって油断しちゃダメですよ」

「くそ……まさか落ちながらも攻撃を当ててくるなんて。流石先生だ」

「あれくらい出来て当たり前ですよ」

モニターから二人の会話が聞こえてくる。話の内容からして摩耶の勝利で試合は終わったみたいだ。

「……やっぱりおかしいぞ」

ふと千冬の頭の中で疑問が生まれた。

「束はいつ、どうやって準一のデータを手に入れたんだ？この数日間準一には一日中監視の目がついていたというのに……。それに、いくら束とはいえたった数日でＩＳを一から作り上げるなんて出来るのか……？」

浮かび上がる沢山の疑問。しかし、いくら考えても答えは見つからなかった。

「藤宮準一……こいつには何か裏がありそうだな」

楽しそうに摩耶と話す準一の姿を見ながら千冬はそう呟いた。

「それにしても、藤宮君は凄いですね。
ＩＳの操縦も初心者とは思えないくらい上手だし、初心者には到底出来ないような高度なテクニックも使いますし……もしかしてどこかでＩＳの動かし方を学んでたとか？」

「いや、そんなことないですよ。
数日前に初めて動かしたんですから」

ＩＳを解除した後、準一と摩耶はそんな会話をしながらアリーナで千冬を待っていた。試合終了後、千冬から、

「アリーナで待っていろ。
話がある」

と言われたからだ。

「けど、話って何なんですかね。
今の試合についての駄目出しとか……？」

「流石にそれは無いと思いますけど……」

二人でそんな話をしていると、アリーナの入口から千冬がこちらに向かって歩いていた。手には紙袋を持っている。

「藤宮準一」

「は、はい！」

「うるさい、もっと声のボリュームを下げろ」

「は、はい……」」

いきなり注意されて少し凹む準一。千冬は短く溜め息を付くと話を始めた。

「藤宮準一、初心者にしては動きがよかった」

「ほ、ほんとですか？」

まさか褒められるとは思って無かった為、準一は浮ついた様子でそう聞き返した。

だが、

「まぁ、今年の入学生の中ではまだまだ下の方だがな。

お前が学園に入るのが遅れた分あいつらは先に進んでいるんだ。お前が今日披露したテクニックなんてクラスの殆どが出来るだろうよ。あいつらに追い付くなら死に物狂いで努力する必要があるぞ。

それでも、お前は学園に入るのか？」

次に千冬の口から出た言葉は冷たい言葉だった。準一には千冬が、

「お前の操縦テクニックじゃ恥をかくだけだ。

よくそんなんでＩＳ学園に入ろうと考えたな」

と暗に言っているようにも聞こえた。

だが、そんなの準一には関係なかった。

「かなり厳しい道のりだってことくらい百も承知です。

けど、これしか道が無いんだ！これが自分の決めた道なんだ！俺が

この道に進むために自分を犠牲にしてくれた人がいるんだ！
だから死に物狂いの努力でも何だってやってやる！皆に追いついて、追い越して、そしてモンド・グロッゾ杯で優勝してやる！」

「……」

「……」

準一の覚悟を聞いて千冬と摩耶は二人してすこしの間黙っていた。

「ふむ……」

その沈黙を破ったのは千冬だった。千冬はそう頷くと、バシッと準一の頭を教員簿で叩いた。

「痛っ！」

「先生に向かってその口調はなんだ。
お前にはＩＳより先に目上の人への話し方を教育する方がいいな」

千冬はそう言うと、しかし口許に微かに笑みを浮かべた。

「だが、口は悪くてもお前の覚悟は伝わった。
今のお前になら……これを渡しても構わないな」

そう言って足元の紙袋から何かを取り出す千冬。そして、

「本当はお前にこれを渡していいのかと迷っていたのだがな……今のお前なら大丈夫だろう。
受け取れ、お前の専用機だ」

千冬は準一に小さな箱を渡した。中にはブレスレット型の待機状態のＩＳが入っていた。

「え、専用機って」

「織斑先生、どういうことですか！？」

準一の言葉を遮るように摩耶が千冬に対してそう言った。いつものほほんとした口調と違い、その口調はかなり取り乱していた。

「山田先生、詳しいことは後で話す」

摩耶の耳元でそう告げると、再び準一に向き直った。準一はオロオロとした様子で自分の手の中にあるＩＳと千冬の顔を交互に見ていた。

「どうだ、専用機を持てて嬉しいか？」

「いや……俺なんかが専用機を貰ってもいいのかな……」

「……その話をするまえに、一つ聞きたいことがある。藤宮、お前は篠ノ之　束のことを知っているか？」

「はい、確かＩＳの基礎理論をたった一人で考案、実証し、全てのＩＳのコアを造った人ですよね？」

「そうだ、じゃあもう一つ質問をする。藤宮、お前はその篠ノ之　束に会ったこと、あるいは話したことはあるか？」

「いや、無いです……」
「ふむ……そうか。
すまないな、変なことを聞いて」
準一への質問を終えた千冬は再び謎に苛まれた。
『こいつと千冬に接点は無かった。だとしたら、このＩＳに束は関わっていないのか……？
だが、ＩＳは束にしか作れないはずだ……』
謎は深まるばかりで、千冬は頭を抱えた。
「あの……」
と、そんな千冬に準一が声をかけた。
「……何だ？」
「あの、何であんな質問したのですか……？」
「気にするな。それよりせっかく専用機を貰えたんだ、起動くらいしてみたらどうだ？」
怖ず怖ずとそう尋ねる準一に対し千冬は話を逸らすべく違う話を仕掛けた。
準一も質問に関してはこれ以上詮索することはなく、
「……そうですね、これから俺の相棒的存在になるＩＳですもんね」

と言うと箱の中からＩＳを取り出した。
すると、箱の底に何やら紙が入っているのが見えた。
「なんだ、これ」
準一がそれを取り出すと、そこには、
『Ａｓｕｋａ。
Ｎａｍｅｄ　ｂｙ　Ｇ．Ｓ』
と書かれていた。
「……Ａｓｕｋａ……飛鳥？」
「恐らくこのＩＳの名前ですね。
Ｇ．Ｓは名付け親のイニシャルかしら……だとしたら誰かしら」
摩耶が考え込みながらそう呟く。昇も千冬もＧ．Ｓのイニシャルをもつ人物を持つ人物について考えたが、思い付かなかった。
「……これ以上考えても埒が明かないな。一旦詮索するのは止めよう」
千冬はそう言うと準一の方を向き、
「今はお前専用ＩＳの初起動の方が重要だ。
藤宮、やってみろ」
と告げた。
準一は小さく頷くと、ブレスレット型の待機状態のＩＳを左腕に嵌

めた。そして、

「……飛鳥、起動！！」

左腕を空高く翳してそう叫んだ。するとブレスレットが輝きだし、その光が準一の身体を包みはじめた。そしてその光が消えると、そこにはＩＳ『飛鳥』を身に纏った準一の姿があった。

「これが……飛鳥……。なんか特徴無い機体ですね」

自分の身体に装着されたＩＳを見てそう呟く準一。すると千冬がフッと笑って準一に話し掛けてきた。

「当たり前だ、そのＩＳは今の段階ではまだ訓練機となんら変わらない。お前が機体の操縦を重ねることでこの機体が自動的にお前に合わせて初期化と最適化をしてくれる。その時に初めてお前専用の機体になるんだ」

「なるほど……」

準一は千冬の話を聞きながら自分の手を開いたり閉じたりする。意識すると同時に身体が動く。ＩＳを装着してもいつも通り身体は自由に動いた。

「どうだ、違和感はないか？」

「はい、ありません」

「そうか。じゃあＩＳを解除しろ」

千冬に言われるがままにＩＳを解除する。すると、２メートルほどあるＩＳは光に包まれ元のブレスレット型に戻った。

「よし、では今日はもう帰ってくれて構わない。
そのＩＳはお前に渡しておく。ちゃんと管理しとけよ」

千冬はそれだけ言うとくるりと身を翻しアリーナから出ていった。
そんな千冬を追い掛けるように摩耶も駆け出したが、ふと準一の方を向くと、

「次に準一君が登校するのは三日後ですよ。その日から準一君には量に入ってもらいます。絶対に遅刻しないで下さいね～」

声を大きくして準一に向かってそう言った。

「わかってますよ」

準一が苦笑いしながらそう返すと、摩耶は笑顔で頷き再び千冬の後を追い掛けはじめた。

「はぁ～、疲れた……」

背伸びをしながらそう呟く準一。上げた腕に装着されたＩＳが準一の目に映った。

「俺専用のＩＳか……」

そう呟いた準一の口許に笑みが浮かぶ。準一は俄然やる気が沸いて来た。

「よし、帰るか！」

「織斑先生、どういうことですか？
編入生に専用機が渡されるなんて前代未聞ですよ」

千冬と摩耶がモニタールームに戻ると、摩耶がそう千冬に尋ねた。

「私にもわからない。
始めは束の仕業かと考えていたが、どうやら違うみたいだな」

「だからさっき藤宮君にあんな質問してたんですね」

摩耶の言葉に千冬は小さく頷くと、椅子に腰掛け大きく溜め息をついた。

「束が関係していない……なら一体誰の仕業なんだ……」

「謎ですね……」

二人の間に沈黙が流れる。と、何かを決心したかのように千冬が椅子から立ち上がった。

「山田先生、確か藤宮がどの部屋に入るかはまだ決まって無かった

な？」

「はい、恐らくは織斑君と同じ部屋になるでしょうけど、最終的には藤宮君に決めてもらおうと考えてます」

「そうか、なら今ここで藤宮の部屋を決めてしまおう」

「え、どうしてですか……？」

突然の千冬の提案に摩耶は戸惑いながらそう言葉を返した。

「……藤宮の部屋に監視カメラを設置する為だ」

まるで苦渋の決断だと言わんばかりに千冬はそう言った。

「そっ、そんなことしたらプライバシーの侵害に……。第一、何故そんなことを？」

「……今回の一連の事件、藤宮という男がＩＳを起動させたこと、そしてその藤宮に専用機が送られたこと、全て裏に何者かの思惑が働いているように私は思う。その何者かが誰なのかはわからない、だが一つ言えることがある。それは、騒動の中心にはいつも藤宮がいるということだ」

「確かにそうですが……もしかして、織斑先生は……」

「あぁ、今回の事件は藤宮が黒幕じゃないかと疑っている。仮に違うとしても、黒幕と藤宮に関連があるのは間違いないだろう。だとしたら、監視カメラを通して藤宮を監視していれば何かが分か

るかもしれない」

それに、と千冬は続ける。

「元々藤宮はＩＳを起動させた時点で日本政府から監視される立場にいる。私の弟と同じでな。

もし監視がバレたとしても、藤宮には日本政府からの命令だと言えばいいさ」

千冬はそう言うと机の引き出しからファイルを取り出した。その中には寮部屋の見取り図があった。

「……わかりました。

織斑先生も覚悟の上での話なんですね。なら私も賛同します」

見取り図を見つめる千冬に摩耶がそう話しかけた。千冬はフッと笑い摩耶の方を見ると、

「ありがとう」

そう感謝の意を述べた。

第１２章　新生活の始まり

準一がＩＳ学園を訪れてから3日後の朝、藤宮家にて――その玄関にはＩＳ学園の制服に着替えた準一が大きな鞄を片手に立っていた。今日は準一の初登校日かつ寮生活の始まりの日である。だからしばらくの間は長らく過ごした我が家にしばしの別れを告げることになる。

「忘れ物はねぇな？」

玄関の鏡を見ながら身嗜みを確認する準一に父親の新一がそう話しかける。

「大丈夫だよ、何回も確認したし」

「そうか……。

ハンカチ、ティッシュは……」

「持ったよ、てか子供じゃないんだから。いちいち言わなくてもやってるって」

「うっ……そうか……」

準一の言葉に暗い顔をする新一。新一は自分の息子の心配をしているだけだが、準一にはそれは有り難くもあり迷惑でもあった。

「……そういや、由紀は？」

話を変えようと準一は由紀のことを聞いた。すると、新一は困った

ような顔で、

「由紀の奴、今日は朝練があるからって朝早くから学校に行ったよ。たく、自分の兄の見送りくらいしてやれってのに……」

そう準一に告げた。だが、新一とは違いそれを聞いた準一は別に嫌な思いなどしていなかった。むしろ、これでこそ由紀だと思っていた。

「あいつの自己中心的性格は間違いなく佐喜子譲りじゃな。その佐喜子自身も今日家におらんし……親子揃って手を焼かせる……」

ぶつぶつとそう呟く新一。佐喜子というのは準一の母親の名前だ。佐喜子は著名な建築デザイナーであり、毎日世界中を飛び回り様々な建造物のデザインをしている。そのため、佐喜子が家に戻ってくることはめったに無い。新一が準一のことを大袈裟なくらいに気にかけるのも、家にいない佐喜子の代わりに準一や由紀の世話を新一がずっと見てきたからだ。

「まぁまぁ、別に俺は気にしてないから……」

そんな会話をしていると、ピンポーンと家のインターホンが鳴った。準一がドアを開けると、家の前に一台のタクシーが停まっているのが見えた。

「藤宮準一様、お迎えにあがりました。どうぞお乗り下さい」

タクシーから黒いスーツの男性が下りてくると、後ろのトアを開け

てそう言った。

「すごいな……流石有名人、扱われ方が普通と違うな」

「俺が一人でいるところを狙われる可能性が大いにあるから、それを防ぐための策だってさ」

そう言うと準一はタクシーに乗り込んだ。ちらりと家を見ると、少しだが寂しく感じた。

「じゃあ、行ってこい！
お前の活躍、楽しみにしてるぞ」

「おう、やってやるぜ！」

寂しさを紛らわすかのように準一は新一に力強くそう言葉を返した。
そしてタクシーは藤宮家を離れＩＳ学園向けて走り出した。

「Ｚｚｚ……」

今日からＩＳ学園に通うという緊張からか、準一は昨日一睡も出来なかった。その為準一はタクシーの中でぐっすり眠っていた。
と、タクシーが徐々にスピードを落としていきやがて停止した。

「藤宮様、着きました」

「ん……はい……」

運転手の呼びかけで目を覚ました準一。寝ぼけたまま運転手に言葉を返し外に出た。

「ん〜〜〜、着いたか」

背伸びをしながらそう呟く。タクシーが停まったのはＩＳ学園校門前だった。

「藤宮様」

と、荷台から準一の荷物を取り出してきた運転手が準一に話しかけてきた。

「はい？」

「ええと、ご迷惑じゃなければサインを頂きたいのですが……」

そう言って運転手は胸ポケットから手帳を取り出すと空白のページを広げて準一に渡した。

だが、まだ有名にも何にもなっていない準一がサインなど考えている訳がなく、

「……すみません、サインとかまだ決めてないんで」

そう言って運転手の申し出を断った。そうですか、と残念そうに手帳を引っ込める運転手。だが、ふと閃いたような顔をすると、

「……じゃあ、またいつかサインをするという念書をして頂いても構わないですか？」

そう言って再び手帳を出してきた。

「……それなら構わないですけど、どうしてそこまで？」

手帳を受け取りそこに念書しながらそう尋ねる準一。すると運転手は不思議そうな顔をして、

「あれ、さっきお父様と約束されていたじゃないですか。絶対活躍するって」

そう言った。

「まぁ、確かに言いましたけど……まだ不確定ですよ」

準一は苦笑いしてそう言葉を返す。朝新一と話していた時は強気だった準一だが、今は少し弱気になっていた。

「大丈夫ですよ。私は貴方の活躍を期待してます」

運転手はニッコリ笑ってそう準一に言うと、タクシーの中へと戻っていった。

「あ、ありがとうございます」

タクシー向かって頭を下げる準一。タクシーは軽く一回クラクションを鳴らすとその場から走り去っていった。

『……期待してくれる人が沢山いるんだ。なんとしても活躍しないとな』

元気づけられた準一は心の中で自分の決心をより堅固なものにすると、ＩＳ学園の中へ歩みを進めた。

「2分オーバーだ。登校初日に遅れるとは随分良い身分だな」

「き、きっと藤宮君にも何か事情があったんですよ」

職員室前に着いた準一を待ち構えていたのは、腕を組み少し怒った様子で仁王立ちした千冬とその隣で相変わらずおどおどしている摩耶だった。

「すみません……学園内で迷っちゃって……」

準一は息も絶え絶えにそう謝る。職員室の場所がわからなかった準一は学園内をさ迷い続け、ようやく職員室に着いたのだった。

「事前に地図を見て場所の確認くらいしておけ」

千冬はそう言うと同時に予鈴が鳴り、千冬は廊下を歩き始めた。

「ついて来て下さい、朝のホームルームの時間です」

摩耶もそう言うと千冬の後を追って歩き出した。その摩耶の後を追って準一も歩きだす。

職員室からちょっと歩いた先に準一の自教室、１－Ａがあった。教

室内からは女の子の声が騒がしいくらい聞こえる。

「ここで待ってろ」

そう言うと千冬と摩耶は教室へ入っていった。二人が教室に入った途端……正確には千冬が入った途端教室からはあの騒がしい声が聞こえなくなった。

「……恐ろしいくらいの支配力だな」

教室の様子を伺ながらそう呟く準一。と、教室のドアが相手中から摩耶が顔を覗かせた。

「藤宮君、入ってきてください」

「は、はい」

緊張しながら準一は教室に入る。最初に準一の目に映ったのは教室を埋め尽くすくらいの女子。何処を見ても女子しかいない、しかもその全員が自分を見つめているという光景だった。

『ヤバいな……男は一人で後は女子しかいないとは聞いていたが、これはきつい』

冷や汗をかきながらそう思う準一。壇上を見ると千冬が自己紹介するように促していた。

緊張した足取りで教壇の前に立つ。クラス全体を見渡せる場所に立ち、改めて女子の多さを痛感した。

「えっと……藤宮準一といいます……趣味は」

「「「キャアアアアア！！」」」

自己紹介しようと口を開いた準一だが、クラスメートの悲鳴に近い歓声に遮られてしまった。

「やった、男子だ！」

「今度は本物の男子よね？」

準一を話題にして盛り上がるクラスメート。それが災いしてより緊張してしまった準一は話す予定だった自己紹介の内容を頭から吹き飛んでしまった。だが、そんなことを露も知らないクラスメートは皆自己紹介に期待しているのか目を輝かせて準一を見つめている。

「お……」

更なる緊張の高まりからか、準一の頭は完全にショートしていた。そして何も考えられなくなった準一は、

「俺は、将来モンド・グロッソに出て優勝してやる！宜しく！」

自己紹介のはずがクラスメートの前で自分の夢を堂々と告白してしまった。

「……」

準一を見たまま硬直するクラスメート。やがてその中の一人が吹き出すと、それに釣られて何人かが笑い始めた。

「なっ……」

徐々に顔を赤くする準一。さらにそんな準一に追撃を加えるかのように教室の後ろの方から高笑いが聞こえてきた。

「ホホホ、ＩＳに関わるようになってまだ一ヶ月も経っていない初心者の貴方が、あのモンド・グロッソで優勝するですって？日本人は冗談がお上手ですね」

わざわざ席を立ち準一にそう話しかける女性。ウェーブのかかった金色のロングヘアーの女性、イギリスの代表候補生のセシリア・オルコットだった。

「この私、セシリア・オルコットを差し置いてモンド・グロッソに出場、しかも優勝するですって？しかも大してＩＳの知識や経験を持たない貴方が？随分嘗められたものですわね」

「……何様だよ、アンタ」

セシリアに馬鹿にされ、先程までの恥ずかしさなど吹き飛び、代わりに怒りが込み上げてきた。目を細めてセシリアを睨みつける準一。セシリアは少したじろいだが、それでも反論する。

「なっ、この私に対して何様ですって？このイギリスの代表候補生、セシリア……」

「代表候補生ってのは、そんな簡単に人の人生決め付けることが出来るくらいの力を持ってるのか？」

「くっ……」

しかし、セシリアの反論は準一の言葉に遮られてしまう。悔しげに唇を噛み締めるセシリアだったが、何かを思い付いたような顔をして口を開いた。

「……だったら、教えて差し上げますわ。代表候補生がどれくらいの強さを持っているのかを」

セシリアはそう言うと準一を指差し、

「決闘ですわ！」

そう高らかに宣言した。

「いいぜ、受けてたつ。男に決闘から逃げる奴はいねぇ」

セシリアの申し出を即受け入れる準一。その途端教室がざわめき出した。

「勝敗は見えてるわね。セシリアの圧勝ね」

「いや、もしかしたら織斑君と同じで善戦するかもよ」

「けど織斑君と違って藤宮君はまだまだＩＳ初心者よ」

皆勝負の結果について話していた。が、そのほとんどが準一の敗北だと予想していた。

「フッ、どうやら戦う前から勝敗は決しているようですわね」
勝ち誇ったかのような顔でそう話すセシリア。だが、
「まぁ、今のままだと圧倒的に俺が不利なのは確かだ。けど、結果なんて勝負してみないと分からないだろ」
準一は不敵な笑みでそう言い返した。睨みを利かして威嚇し合う準一とセシリアだったが、
「もう、授業は始まってるんですよ〜〜！」
摩耶の一声でその日はお開きになった。

放課後、廊下を準一は全力疾走で駆けていた。その姿はまるで何かから必死ににげているように見える。いや、実際逃げていた。
「逃げ切れたか……？」
そう願いながら後ろを振り向く準一。だがそこには、
「「藤宮君〜〜！！」」
準一の願いと反して何十人もの女子が藤宮のことを追い掛けてきていた。
「ちっ、どんだけタフなんだよ……」

前の学校では運動部に所属し、体力にも自信のある準一であるが、そんな準一の走りについて来る女子達の姿にア然とする。そして再び走り始めた。

「……なんで俺がこんな目に合わないといけないんだ？」

走りながら準一はしんどそうにそう呟いた。

事の始まりは放課後、授業を終えた教室内で起こった。
初登校にしていきなり7限もあるハードな授業受けを終えた準一は疲れから机に突っ伏せて眠っていた。すると、そんな準一を取り囲むように数人の女子が現れた。

「……？」

寝ぼけた様子で机から起き上がる準一。状況を理解するのに数秒を有した。

「……何？」

準一がそう尋ねると、一人の女子が机に乗り出してきて、

「藤宮君って、何処からきたの？」

逆にそう尋ねてきた。さらにそれを皮切りに、

「藤宮君って兄弟いるの？」

「藤宮君ってどんな子がタイプ？」

と他の女子も様々な質問を投げ掛けてきた。更にその様子を見ていた女子達もそこに加わり、結果何十人もの女子から質問責めを喰らうことになった。

「待て待て！一旦落ち着け！」

困った準一はそう言ったが、女子の勢いは止まる所か更に増した。

「質問はいいが……さすがにこんなにもは答えられない！」

そして嫌気がさした準一は咄嗟に教室から逃げ出した。

「あ、逃げた！」

「追えぇぇ！！」

そんな準一を追い掛けて女子達も教室を出た。

こうして、次捕まったら恐らく解放されることは無い、女子との地獄の鬼ごっこが始まったのだ。

「くそ……セシリアとかいうやつには喧嘩吹っかけられるし、女子には追い掛けられるし、今日は厄日だ……」

ぶつぶつと不満を呟きながら廊下を駆ける。すると、向こう側から誰かがこっちに向かって走ってきた。

「……お前は、」

段々と近付いてくるその姿、やがて準一はその正体を確認することが出来た。

「藤宮、こんなところにいたのか。探したんだぞ」

その正体は世界で初めてＩＳを動かした男性、織斑一夏だった。一夏は準一の前で立ち止まるとそう告げた。

「あ、あぁ……」

たどたどしくそう答える準一。というのも、準一と一夏は今まで話したことが無かったからだ。

「ん、どうした？」

「いや、何でもない……。所で何の用だ？」

準一がそう尋ねると同時に後ろの方から沢山の足音が聞こえてきた。その中から藤宮を呼ぶ声も聞こえる。

「まだ追ってくるか……」

「あぁ、女子達に追われているのか。いつも転校生、特に男が来たら必ずこうなる。もはや定番だな」

一夏もそれを経験したことがあるのか体験談を語るかのようにそう

話すと、何処かに隠れるよう準一に指示した。
一夏の言うことに従い近くにあった教室のドアを開けて中に隠れる。

「あれ、織斑君だ」

「藤宮君見なかった？」

「藤宮なら教室に戻るって言って猛ダッシュでそこの廊下を駆けていったぞ」

準一が教室に隠れると同じタイミングで女子達が一夏と出あったようで、廊下からは女子達が一夏に準一の居場所について尋ねる声が聞こえた。
そして、一夏はその質問に対して嘘をつくことで女子達と準一を引き離そうとした。

「教室だって！」

「よし、それなら隅に追い詰めて捕まえよう」

女子達は互いに作戦を確認し合うと一夏に別れを告げて教室に戻っていった。

「……もう大丈夫だぞ」

女子達が廊下から見えなくなったのを確認すると一夏は準一にそう呼びかけた。それに反応して教室を出る準一。確かに女子達の姿は見えなかった。

「……助かった」

「気にするな、俺も何度も同じ目にあったことがあるからな」
そう言ってニッと笑う一夏。それにつられて準一もフッと笑みを浮かべた。
「そういや、さっき俺のこと探してたって言ってたが、なんでだ？」
「あぁ、千冬姉……いや、織斑先生にお前を寮に連れて来るように言われてたんだ。藤宮一人だと絶対迷子になるからってさ」
「……」
何とも言えない気持ちになりながらも、実際それは正しいと思った。準一一人で寮に向かっていたら確実に迷う自信があった。
「という訳で、俺が寮まで連れていくからついて来てくれ」
一夏はそう言うと廊下を歩きはじめた。それに続いて準一も歩きはじめた。

「そういや、今度セシリアと対決するんだってな」
校舎内を二人で歩いていると、不意に一夏がそう聞いてきた。
ちなみに何故一夏があたかも他人から準一ＶＳセシリアの情報を得たかのように話しているかと言うと、準一が自己紹介したときに一夏はその場にいなかったからだ。

「あぁ、成り行きでそうなった」

「そうか。
奇遇にも俺の初対戦の相手もセシリアだったんだ」

「そうなのか？どっちが勝ったんだ？」

「僅差でセシリアの勝ちだった。
けど俺も後一歩のとこまでセシリアを追い詰めたんだぞ」

「へぇ～……」

一夏の話を聞いて準一はチャンスだと思った。負けたとはいえ、一夏はＩＳ初心者でありながらセシリアを後一歩のとこまで追い詰めたのだ。そんな一夏に対セシリアのアドバイスを聞けると考えたからだ。

「織斑、聞きたいことがあるんだが……」

「どうやったらセシリアに勝てるか……か？」

「あぁ、そうだ」

一夏に期待してそう尋ねる。だが、

「……セシリアを倒すためのアドバイスは出来ない。なぜなら俺のＩＳ『白式』と藤宮のＩＳは違うからだ。
俺が使えた戦法が藤宮のＩＳにも使えるとは限らないからな……」

「そうか……」

一夏の答えは準一が望んでいたような答えとは違った。落胆する準一、しかし一夏は話を続ける。

「ただ、セシリアに勝つための１番の近道なら知ってる。
それは、自分のＩＳについてよく知ることだ。試合までね一週間、出来るだけ多くＩＳを操縦する時間を作り、そして自分の戦い方を見つけるんだ」

「自分の戦い方か……」

準一は自分の腕に装着されたＩＳ『飛鳥』を見つめる。果たして飛鳥に１番あった戦い方とはどんな感じなのか、今の準一には検討もつかなかった。

「ありがとうな、織斑。
お前のアドバイス通りやってみるぜ」

「おう。
それと『織斑』じゃなくて『一夏』でいいぞ」

一夏はそう言うと同時に足を止めた。

「着いたぞ、ここが寮だ」

「そういや、準一は何号室なんだ？」

寮の階段を登っていると一夏が唐突にそう尋ねてきた。

「俺は……１０２６号室みたいだ」

ポケットからプリントを一枚取り出す準一。それは朝千冬が準一に渡したプリントで、中には様々な情報が書かれていた。そしてその中には準一がこれから暮らすことになる寮の部屋番号も書かれていた。

「１０２６……ってことは、俺の隣部屋だな。もし何か困ったことがあったら部屋に来ていいからな。隣なんだしそれが１番手っ取り早いだろ」

「一夏……お前いい奴だな」

「そんなこと無いって。これからも宜しくな」

そう言って準一の肩を叩く一夏。この学園に来て初めて本物の男子と知り合えたことが一夏には嬉しかったようだ。

「おう、よろしくな」

勿論それは準一も同じである。女子ばっかりの環境にまだ慣れていない準一にとって男子である一夏は話し相手として重要な存在だった。

「一夏〜〜〜〜！！！！」

と、準一の耳に誰かが一夏を呼ぶ声が聞こえた。声のした方向、つ

まり廊下の奥を見ると誰かが猛ダッシュでこちらに向かって走ってくるのが見えた。
ツインテールをなびかせながら走ってくる女の子。２組の鳳　鈴音であった。

「あ・ん・た・ねぇ〜〜〜。
なんで待っててくれないのよ！！」

鈴はそう叫ぶとさらにスピードアップしてそのまま一夏に体当たりした。相当なエネルギー量だったのだろう、一夏は勢いよく廊下の床にたたき付けられた。その様子は余りに衝撃的だった。
しかし、加害者の鈴はそんなこと気にしていないらしく、倒れた一夏に詰め寄ると、

「なんで約束破るのよ。
約束守れない男なんて」

と言い放った。

「わ、悪い。急に用事が出来てさ……」

頭をぶつけたのか頭頂部をさすりながらゆっくりと立ち上がりそう話す一夏。その話を黙って聞いていた鈴だったが、話を聞き終えると、

「ふぅん……用事ねぇ……」

と呟き準一を横目で見た。その目からは、『よくも私な一夏を取ってくれたわね』と恨みのようなものが感じ取れた。

「す、すまん……」
その威圧感にひるんでしまい、準一は思わず謝ってしまった。鈴は溜め息一つつくと、準一に手を差し延べ、
「私、2組の鳳　鈴音。中国の代表候補生よ。皆からは『鈴』って呼ばれてるからあんたもそう呼んでくれて構わないわ」
と軽く自己紹介してきた。
鈴が手を延ばしてきた時はシバかれるのかと思い身構えていた準一だったが、そうではないと理解すると、
「1組の藤宮　準一だ。宜しく」
そう言って手を握り返した。
「宜しく」
鈴はそれだけ言うと準一から手を離し、体を一夏の方に向け、
「……今回は許してあげる。
その代わり、今から一緒に夕飯食べに行くわよ！」
そう言うと強引に一夏の腕を取り歩きはじめた。
「ちょっと待て！
準一も来い……って無理矢理引っ張るな！」
鈴に半ば引きずられる形で廊下を進んでいた一夏だったが、後ろを

振り向き準一の方を見るとそう告げた。だが、当の準一は、

「俺のことは気にせず二人仲良く夕飯食べてきな」

と笑顔で言葉を返した。

「お前一人だと迷子になるだ……」

「準一、ナイス！
じゃあ行こ！」

準一に対して何か言おうとした一夏だったが、その言葉は鈴の声で掻き消された。そして鈴は一夏を連れて意気揚々と食堂へと向かった。

「……さて、どうしようか」

荷物を部屋に置くと、一日の疲れが一気に押し寄せてきて準一は倒れ込むようにベットに横たわった。

「……今日は濃い一日だったな」

仰向けに寝転がった準一は目を閉じて今日の出来事を思い返す。セシリアに絡まれ、女子に追いかけ回され……この学園に来るまでは平和なハーレム生活を送れるのだと楽しみにしていたが、現実はそんなに甘く無かった。準一の理想はたった一日で崩されてしまった。

「……もう夕飯いいや」

準一は一人そう呟くと深い眠りへと誘われた。

明日はもう少しいい日になりますように、そう願いながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7712s/

IS[インフィニット・ストラトス] 空舞う比翼

2011年10月8日18時35分発行